

# ウィリアム・マーシャルの植林論

William Marshall on Planting

今村 隆 男  
Takao IMAMURA

2010年11月2日受理

## 1

ウィリアム・マーシャル(William Marshall)は、アーサー・ヤング(Arthur Young)と共に、18世紀後半のイギリスの農業(主として林業)に関わる文献を多く残したことで知られている農業作家・実践家である。両者の相違点についてケリッジ(E. Kerridge)は、ヤングが理論家、政治家であったのに対し、マーシャルは経験に基づく実践家の側面が強かったとしている(Kerridge 52-3)。実際に、マーシャルはイギリス各地に数年単位で滞在し、その地域の事情に精通した上で『農業の詳細』(*Minutes of Agriculture*, 1778)を始めとして、各地の詳細な農業書を出版した。『植林と観賞用庭園』(*Planting and Ornamental Gardening*, 1785)も、農場主に招かれたスタッフォードでの2年間の滞在期間中の実際の体験を基盤にして書かれた農業実践のための指南書と言えるものであり、それに大幅に加筆をして1796年に出版されたのが『植林と田園の外観について』(*On Planting and Rural Ornament*)である。

興味深いのは、マーシャルがこれらの植林論を書いていた時期がピクチャレスク趣味流行の時期にちょうど重なることであり、マーシャルが取り上げた「植林」、「庭園」、「観賞」などの問題は、まさにピクチャレスクの風景論争に深く関わる事柄であった。それゆえ、マーシャルの風景に関わる主張がより成熟したものとしてまとめられている『植林と田園の外観について』を、18世紀後半から19世紀始めの植林観の変遷の流れの中において読むことは、森林風景をめぐる論争の理解の一助となると思われる。

## 2

『植林と田園の外観について』は2つの巻からなり、第1巻は、第1部(Subject)「植林論」と第2部「田園の外観」とで構成される。「植林論」においてマーシャルは、木々の成長する様を見るのは植林の楽しみの一つであると同時に、所有者の利益にも結びつくとする。つまり、彼は植林を実用性と装飾性の両方の視点からとらえ、その両方共が植林の必要性を支えているもの

であるとして論を進めている。そして、植林の有用性は、所有者にとってだけでなく、国家の将来にも繋がってゆくとして、植林における装飾性に対する有用性の優位を説くに至る。その前提にたつてマーシャルは、植林を小規模な生け垣と中・大規模な木立や森に分類し、具体的かつ詳細に植林の実践家の立場から解説する。

マーシャルが特に危惧するのは、農業目的の伐採のために森林が減少していることで、特に減少しているのはイギリス海軍の艦船のための材木用樹木(Timber tree)であるという。大型の大砲艦船のためには、オークの大木が約2000本必要であるが、それは50エーカーの森に匹敵すると、材木用樹木の広大な森林の必要性が強調される。材木を供給する森林の激しい減少は、国家にとっての一大事である。それゆえ、オークの植林は公共善(public virtue)であると、18世紀初頭のポーブやアディソンから続く議論を踏襲しながらマーシャルは植林の公共的有用性を擁護する。

続いて彼は植林の実践方法を詳述してゆくが、そこでまず彼が重視するのは、その土地の土壌の質を考慮し、それに適した木種を選ぶということである。具体的にマーシャルが薦めるのは、オークの他、トネリコ、ニレ、ブナといった在来種に加え、落葉松や柳などの外来種である。マーシャルは、それまで植林の中心であったモミの木は荒れた高地に適しているとしながらも、他の種類の木とは共存しにくい性質を重視し、それに代わる材木用樹木として落葉松を強く推奨する。その理由は、以下のように詳述される。落葉松は、オーク同様、適度に枝が曲がっていて造船用の建材に適しており、また農業に不向きな土壌に合っているのも、つまりオークとは成長する環境が異なるので、船材としてオークと相互補完的である。さらに彼は、軍艦用材として重要な耐水性がオークの2倍であること、他の丈夫な木々と比較にならないほど成長が早いこと、ヒースの荒れ地など条件の劣悪な場所でも育つ逞しさを持っていること、などを強調する。そして、できるだけ早く落葉松をイングランドの荒れた高地などに植林するように薦める。そうすれば、材木の輸入の必要

は無くなるし、農業にも影響しないからである。

### 3

第2部「田園の外観」において、あるべき田園の外観に不可欠の要素としてまずマーシャルが挙げるのは、「自然(Nature)」、「趣味(Taste)」、「有用性(Utility)」である。この三者の中に「有用性」が含まれていることは、田園の風景美にも有用性が不可欠であるとマーシャルが考えていたことを意味している。その原則に従って彼は、ピクチャレスク旅行の人気の目的地であった湖水地方の「荒れ果てたヒース(の茂る土地)」よりも、森や畑、牧場などの混在した「自然と人工が見事に融合している」土地を田園の風景としてより好ましいと主張する。「放置された(neglected)自然」よりも、「人間の手の入った(cultivated)自然」を尊重するその態度は、のちに取り上げるナイトやプライス、さらにはクレアなどと対極をなすものである(Marshall 2 245-50)。

続いてマーシャルは、この原則の具体的な適用の方法について解説する。その前置きとして彼は、己の技(Art)を知り、場所と目的をわきまえることが非常に重要であると説く。そのためには、神の力の現れである自然美から学ぶことが必要であるとするが、マーシャルによれば、自然から学ぶとは観察によってその土地の本質を知ることである。しかしながら、いかに自然から学ぶことが大切であるとは言え、自然は完全無欠の存在ではありえない。それゆえ、マーシャルがより尊重するのは、完全ではあり得ないその自然に人間の手を加えることによって、より完全であると思われる状態に近づけることである。彼によれば、適切に「手を加えられていない(negligent)自然」はより「低級」な自然であり、人間が手を加えることによって完全に近づいた自然はより「高級」な自然であるということになる。この原則は領地内の配置にも適用される。庭園であればその中心は人間の作った屋敷であり、そこから遠ざかるにつれて徐々に「自然」と「偶然」が支配するように変えてゆくべきとマーシャルはする。しかし「偶然」にまかせることによって完全に「放置された」自然を、彼は受け入れることはできない。人間の技術は「熟練」して「適度に」使うことによって自然をより望ましいものにせよ、というのがマーシャルの主張なのである(Marshall 2 267-77)。従って、木々が密に茂りすぎた森は一部を芝地に変えて「軽くする」べきであり、逆に木々の少ない山や丘は当然のことながら植林すべきであるということになる。その際、木の高さや形、色彩、用途が考慮されるべきである。屋敷近辺で装飾が必要なところには外見がよければ有用性の高い外来種を植えてよいし、屋敷から離れて装飾の必要のないところには有用性のある材木用樹木が望ましい(Marshall 2 255)。

### 4

次に、『植林と田園の外観について』におけるマーシャルの植林観を、時代の流れの中において検証してみたい。そこで、まず落葉松の植林の歴史について確認しておきたい。イギリスへの最初の落葉松の導入の記録は1629年で、初期には落葉松は専ら庭園の装飾としてみなされていた(Jarvis 155-7)。1725年にスイスから100本の落葉松が持ち込まれたことによって国内育成が始まったのが契機になって、比較的寒冷な北部イングランドやスコットランドにその植林は広がり、18世紀後半には材木用樹木としての落葉松の植林が急増する。最初に大規模な植林を行ったのはアソル公爵で、1740年から三代に渡ってハイランドの領地に1400万本の落葉松を植林したと言われている(Thomas 210)<sup>1)</sup>。落葉松の植林が集中的に行われるのは、1790年前後である。いくつかの例を挙げると、ランダフ司教(Bishop of Llandaff)だったワトソン(Richard Watson)は、1787-88年にかけて湖水地方アンブルサイド周辺に5万本近くを植林し、1789-91年になるとヨークシャーのフォイストン(Foyston)に20万本を植林したミルンズ(R. S. Milnes)を始めとして各地で数万本単位の落葉松の植林が行われている(Jarvis 157)。従来から森林率の極めて小さいイギリス各地にこのような大量の植林が行われた結果、19世紀にはいると、

...the face of our country has, within the last thirty years, been completely changed by the numerous plantations of larch that have sprung up on every barren spot.... (Phillips 2 8)

とされるように、落葉松の植林はイギリスの風景を変えてしまったと言われるほどになってゆく。

### 5

このような状況を背景にして、落葉松の植林に対する見方はどのように変わって行ったのか。マーシャルの立場を明らかにするために、18世紀後半から19世紀始めにかけての落葉松の植林観の変遷の過程を辿ってみたい。落葉松以前に植林の中心になっていたのは同じ針葉樹のモミであり、落葉松の植林についての記述は、大規模な植林が広がっていった1974年に出版された湖水地方の農業報告書の中に登場する。ウェストモアランドの報告書においてプリングル(Pringle)は、耕作地に適さない荒れ地に落葉松を植えるべきであるというランダフ司教の意見を紹介し、個人所有の土地に有用性の高い樹木を植えることによって自らの地所を「改善(improvement)することは、所有者個人にとってと同様に国家の富にもなるという意味で「公共の富」に結びつくとする。同年に出版されたカンバーラ

ンドの報告書においてベイリーとカーリー(Bailey and Culley)は、プリングル同様、鋤のはいらぬ荒地がカンバーランドには非常に多いことを強調して、囲い込んで牧羊地にするか、一部の地域に出現していた落葉松の植林を早く導入するかして、生産効率を上げるようにと説いている。専ら有用性を尊重する視点から、落葉松の植林はモミに代わるものとして薦められていたことがわかる。

以上は農業書であるので有用性の尊重はむしろ当然のことであるが、風景美を楽しむために書かれた観光案内書においてはどのように触れられているだろうか。木々の伐採が風景美を損なっているという指摘は早くからみられるが、落葉松の植林について具体的に触れて自らの見解を明らかにしているのは、1800年に出版されたハウスマンによる湖水地方などの案内書である。ハウスマンは、ダーヴェント湖の陰に隠れて訪れる者の少ないバセスウェイト湖(Bassenthwaite)の紹介をする際に、その沿岸にあったマイアハウス(Mirehouse)の所有者ストーリー(Story)による落葉松の植林の「試み(essay)」に注目して次のように説明している。そこには、上記の湖水地方の農業報告書の影響が明らかに認められる。

Here the successful essay of Mr. Story, in rearing a thriving plantation of larches on the rocky front of the barren mountain ought to encourage similar attempts in other parts of Cumberland and Westmoreland to turn almost useless hills to advantage, and beautify the country, by planting them with trees. (Housman 126)

ここでは岩がちの不毛の地への落葉松の植林が、有用性からのみならず風景美の観点からも評価されている。アディソンら18世紀前半の文献において有用性は風景美を高めるのに貢献するものであったが、ハウスマンの主張は基本的には伝統的な価値観を踏襲したものであると言えるだろう。

## 6

これらに対し、共に1794年に発表されたナイト(R. P. Knight)とプライス(Uvedale Price)の風景論には、審美的な視点からの落葉松の植林への激しい反対意見がみられる。ここでは、詩の形式で発表されたナイトの風景論である『風景詩』(The Landscape, A Didactic Poem)と、それに対するマーシャルの批評書(*A Review of The Landscape, A Didactic Poem: also of An Essay on The Picturesque: together with Practical Remarks on Rural Ornament*)に注目してみたい。ナイトは植林する木の

種類について、「自然」の手が適切な土壌、気候の場所に種を蒔いた木々を選ぶよう忠告し、その例としてイギリスの固有種であるオークやブナを取り上げてその「上品で控えめな緑色」(chaste and modest green)を賛美する。そして審美的な視点から、地域の木々の「調和」を乱す木の代表としてモミと落葉松を取り上げる。

O Harmony, once more from heaven descend!  
Mould the stiff lines, and the harsh colours blend;  
Banish the formal fir's unsocial shade,  
And crop the aspiring larch's saucy head:  
Then Britain's genius to thy aid invoke,  
And spread around the rich, high-clustering oak:  
(Knight 3 57-62)

「堅苦しく」、「社交的でない」モミと、「野心に燃えた」、「ずうずうしい頭」を持つ落葉松という常緑針葉樹が批判の対象となっている。18世紀後半、ヤングらが支持したモミの植林に代わって広がっていったのが落葉松であった。「野心に燃えた」、「ずうずうしい」などの形容詞は審美的でも観察によるものでもない。ここには、18世紀を通しての社会変革によって台頭して来た新興商業階層への旧来の地主支配階層であったナイトからの批判を読み取ることも可能だろう。

これに対し、『風景詩』に対するマーシャルの批評は全体として辛辣であるが、中でもナイトの落葉松観に対してマーシャルは極めて厳しい表現で論駁する。マーシャルによれば、ナイトの落葉松観は他には見られない例外的なものであり、この木を伐採してしまうべきであるとする主張はそれまでは全くなかった目新しいものである。逆にマーシャルは、イギリスに持ち込まれた「最も価値ある外来種」であると落葉松を絶賛する。そして、この木を「おだやかな御婦人(peaceful matron)」と呼んでいるが、この表現は落葉松は周囲と調和しないというナイトの批判に対する明らかな反論であるとみなしてよいだろう。そして、マーシャルは、落葉松こそが今後イギリスに「調和」をもたらすものであると全面的に擁護する(Review 25-27)。両者の考える「調和」は、全く質を異にするものなのである。

## 7

19世紀にはいると、グリーン(William Green)は『新湖水地方案内』(*The Tourist's New Guide*)において、“...greatly disfigured by the vile larches, which, in a soldier-like arrangement” Green 244)と風景美の観点から落葉松を激しく批判する。その理由はこの木の尖った先端が軍人の槍や銃剣を連想させるからであるとされるが、さらに彼は次のように外来種の植林批判を展開する。

From this place, having a grand rock, called Fisher Crag, on the left, it is a pleasant descent to the lake by the side of which the road passes for a short distance, having in front plantations of well grown birch, beech, larch, and fir trees demands some attention, as it adds materially to the effect of the scene, the rounding tops of the birch being infinitely superior to the spike headed firs and larches, which, when numerous, are not only offensive in their forms, but in their colours, the one from its sooty blackness, and the other from its vivid green. They can never associate in large plantations with the aborigines of the country. If larches and firs are considered necessary to the well-being of the community, would it not be well to plant them in situations where they would rarely be seen? (Green 1 439)

ここに挙げられている樺とブナは湖水地方の固有種であり、落葉松と樅は外来種である。両者とも「景観の効果に非常に寄与している」とグリーンはしているが、「頂の丸い樺の木の方が、鋭く尖った落葉松や樅よりもはるかに素晴らしい」とその優劣は明らかである。落葉松や樅は、「形ばかりか、煤けた黒やけばけばしい緑といったその色も目障りになる」と、形状的にも色彩的にも批判される。そしてグリーンは景観の調和を持ち出して、固有種と外来種は調和しないとして、「地域コミュニティの幸福」のため、即ち有用性のためにやむをえないならば外来種を「めったに人目につかない場所に植える」ことで調停すべきであると提案する。

バセンスウェイト湖周辺の紹介部分では、グリーンもマイアハウスに言及している。彼は上述のハウスマンの文章を引用した上で、落葉松の尖った頭(“spike heads”)がその景観に影響しないわけではないと正反対の意見を述べる。そして、「醜い木は全て、奥まった見えにくい所に植えるか、そうでなければ美しいものによって見えにくくすべきである」(Green 2 126)と述べているが、これもハウスマンとは対照的である。グリーンには、ナイト同様に有用性が景観に貢献するという視点が認められない。

ワーズワス(William Wordsworth)の『湖水地方案内』(*Guide to the Lakes*, 1835)はグリーンの影響が認められる作品であり、詩人がそこで落葉松批判を行っていることはよく知られている。しかしながら、その批判部分はウィルキンソン(Joseph Wilkinson)の『選り抜きの風景』(*Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*)の序文として出版された1810年版にすでに書かれていた。そこでのワー

ズワスによる落葉松批判は、ナイトらのピクチャレスク理論の影響を残しながらも、現地の地域住民としての詳しい観察に基づく実的な部分を含んでおり、かつその表現は激烈なものとなっている。

It must be acknowledged that the larch, till it has outgrown the size of a shrub, shows, when looked at singly, some elegance in form and appearance, especially in spring, decorated, as it then is, by the pink tassels of its blossoms; but, as a tree, it is less than any other pleasing: its branches (for boughs it has none) have no variety in the youth of the tree, and little dignity, even when it attains its full growth: leaves it cannot be said to have, consequently neither affords shade nor shelter. In spring the larch becomes green long before the native trees; and its green is so peculiar and vivid, that, finding nothing to harmonise with it, wherever it comes forth, a disagreeable speck is produced. In summer, when all other trees are in their pride, it is of a dingy, lifeless hue; in autumn of a spiritless unvaried yellow, and in winter it is still more lamentably distinguished from every other deciduous tree of the forest, for they seem only to sleep, but the larch appears absolutely dead. If an attempt be made to mingle thickets, or a certain proportion of other forest-trees, with the larch, its horizontal branches intolerantly cut them down as with a scythe, or force them to spindle up to keep pace with it. The terminating spike renders it impossible that the several trees, where planted in numbers, should ever blend together so as to form a mass or masses of wood. Add thousands to tens of thousands, and the appearance is still the same—a collection of separate individual trees, obstinately presenting themselves as such; and which, from whatever point they are looked at, if but seen, may be counted upon the fingers. Sunshine, or shadow, has little power to adorn the surface of such a wood; and the trees not carrying up their heads, the wind raises among them no majestic undulations. (Wordsworth xxx-xxxii)

落葉松の「水平に伸びた枝が森の他の木々を大鎌で切り倒す」とは、一緒に植えると他の木々の発育を止めてしまうということであると解釈してよいだろう。いかなる季節においても、一日のいかなる時間帯におい

でも、形状的にも色彩的にも、一本でも集団になっても、落葉松には称賛すべき点が見当たらないという。つまるところ、ワーズワスの批判の要点は、落葉松はそれ自体でも、また他の木々との関係においても、視覚的かつ共生的に全く調和することがないということである。

## 8

マーシャルは、自らの実践体験から各々の植物の地域の土壌や気候への適合性にも言及していたが、この点について共通点が見出せるのは、1783年のメイスン(William Mason)の『英国庭園』(*The English Garden*)であろう<sup>2)</sup>。そこでメイスンは、風景全体の中で調和する固有種に対し、当時盛んに植林されていた外来種のスコットランド樅について、その陰鬱な感じが地平線の景観を汚すからという審美的な理由で批判する。固有種の方を彼が賞賛するのは、それらがイギリスに元々あった、その風土、気候に適合した木であるからである。

メイスンは、理想的な庭園を造るためには、人間の技(Art)によって適切な木をうまく植林すべきであり、それは「固有種」(indigenous)であるべきだとして、次のように言う。

Sagely she (= Art) calls on those of hardy class  
Indigenous, who, patient of the change  
From heat to cold which Albion hourly feels,  
Are brac'd with strength to brave it. These alone  
She plants, and prunes, nor grieves if nicer eyes  
Pronounce them vulgar. (Mason 3 240-249)

ここでメイスンは、寒暖の激しい変化に耐えうる固有種を、洗練さに欠けると言われようと擁護し、イギリスの気候に合わない外来種を移入すべきではないとする。その土地の土壌・気候に適合した木を植えるべきという点ではメイスンとマーシャルは共通しているが、外来種は本来イギリスの風土に合わないメイスンの方は切り捨てている点がマーシャルとは異なっている。

次に引用するのは、マーシャルが落葉松の木をそれまで植林の中心であったモミの木に取って代わるべきものと主張している箇所である。

The Scotch Fir, however, is one of the last trees that ought to engage the attention of the British planter; and should be invariably excluded from every soil and situation, in which any other timber tree can be made to flourish. The North aspect of bleak and barren heights is the only situation in which it ought to be tolerated; and even there, the Larch is found to

outbrave it. In better soils, and milder situation, the wood of the Scotch Fir is worth little, and its growth so licentious, as to overrun every thing which grows in its immediate neighbourhood: this renders it wholly unfit to be associated with other timber trees: we therefore, now discard it entirely from Useful Plantations. (Marshall 1 145-46)

マーシャルがモミを「完全に」排除しようとする理由は、モミの木は荒れた高地に適しているが、他の種類の木と一緒に植えた場合に共存しにくい性質を持っているからである。そして、異なる種類の木と一緒に植える場合は、共存・調和するように慎重に木種を選ぶべきであると、実践家の立場から述べている。しかし、落葉松が他の木々と調和するかどうかについてのマーシャルの見解は見当たらない。

プライスの『ピクチャレスク論』(*An Essay on the Picturesque*)もまた、「調和」をキーワードとして捉えている。彼は、木々の「調和」について、次のように述べる。

It is not enough that trees should be naturalized to the climate, they must also be naturalized to the landscape, and mixed and incorporated with the natives. A patch of foreign trees planted by themselves in the out-skirts of a wood, or in some open corner of it, mix with the natives, much like a group of young Englishmen at an Italian conversazion. But when some plant of foreign growth appears to spring up by accident, and shoots out its beautiful, but less familiar foliage among our natural trees, it has the same pleasing effect, as when a beautiful and amiable foreigner has acquired our language and manners so as to converse with the freedom of a native, yet retains enough of original accent and character, to give a peculiar grace and zest to all her words and actions. (Price 213-214 n)

木々は「自然に従わせる(naturalize)」ことが肝要で、それによって地域の気候風土に「調和」しうるし、同時に地域の風景にも「調和」しうる。この原則に基づけば、たとえ「外来種」の木であっても、人工的に植林したのではなく自然に生えてきて周囲と調和しているものは、「固有種」同様、「喜ばしい効果」を持つということになるので、植林する場合は元々あったものと同種の木を植林するようプライスは薦めている。メイスンは、外来種は決して固有種とは調和すること

がないとしたが、プライスにはメイスンとは異なる「調和」観が認められるのである。

しかし、ワーズワスになると、人工的に植林された木は自然に育った木と本当に調和できるのかという疑問が現れる。この点について、ワーズワスは次のように持論を展開する。

Contrast the liberty that encourages, and the law that limits, this joint work of Nature and Time, with the disheartening necessities, restrictions, and disadvantages, under which the artificial planter must proceed, even he whom long observation and fine feeling have best qualified for his task. In the first place his trees, however well chosen and adapted to their several situations, must generally start all at the same time; and this necessity would of itself prevent that fine connection of parts, that sympathy and organisation, if I may so express myself, which pervades the whole of a natural wood, and appears to the eye in its single trees, its masses of foliage, and their various colours, when they are held up to view on the side of a mountain; or when, spread over a valley, they are looked down upon from an eminence. It is therefore impossible, under any circumstances, for the artificial planter to rival the beauty of Nature. But a moment's thought will show that, if ten thousand of this spiky tree, the larch, are stuck in at once upon the side of a hill, they can grow up into nothing but deformity; that, while they are suffered to stand, we shall look in vain for any of those appearances which are the chief sources of beauty in a natural wood. (Wordsworth xxx)

ワーズワスの結論は、徹底した外来種の植林の排除である。彼は、固有種の木々の自然林は「自然と時間との共同作業」が生み出したものであることを強調し、固有種の木々が生み出す「自然美」にはいかなる人工の植林も匹敵できないとする。

## 9

マーシャルは、農業推進者として風景の有用性を優先させる意見を述べる必要があったものと考えられ、そのことが植林観の変遷の中でのマーシャルの位置を見極めにくいものになっている。しかし、理念中心のピクチャレスクの旅行者や理論家と比べ、豊富な実践経験に裏打ちされた、地域の気候・風土・土壌などを考慮に入れたマーシャルの観察眼やそれに基づく彼の主

張は、ワーズワスらに続く植林理論の展開に大きな貢献をしたと言うことができるだろう。いずれにせよ、マーシャルは「自然」や「調和」に関する議論の変わり目の時代に活躍した作家であったのであり、彼の『植林と田園の外観について』は19世紀にはいつの議論の発展の契機となったと言えるのである。

## Notes

- 1) アソル公爵が1737年に植えた最初の落葉松(Parent Larch)のただ一本の生き残りが今でもダンケルド(Dunkeld)大聖堂の隣地に立っており、その種子から大規模な植林が広がっていった。
- 2) メイスン『英国庭園』の出版は1783年であるが、各巻は各々異なる時期に書かれており、引用箇所第3巻が書かれたのは1779年である。

## Works Cited

- Bailey, John and George Culley. *General View of the Agriculture of Northumberland, Cumberland and Westmorland*. Newcastle - upon - Tyne: Frank Graham, 1972.
- Green, William. *The Tourist's New Guide, Containing a Description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire, with Some Account of their Bordering Towns and Villages*. Kendal: R. Lough, 1819.
- Housman, John. *A Descriptive Tour, and Guide to the Lakes, Caves, Mountains, and other Natural Curiosities, in Cumberland, Westmoreland, Lancashire, and a part of the West Riding of Yorkshire*. London: C. Law, 1800.
- Jarvis, P.J. "Plant Introduction to England and their Role in Horticultural and Sylvicultural Innovation, 1500-1900" in *Change in the Countryside: Essays on Rural England 1500-1900*. Ed. H.S.A. Fox and R.A. Butlin. 1979.
- Kerridge, Eric. "Arthur Young and William Marshall." *History Studies* 1 (1968): 43-53.
- Knight, Richard Payne. *The Landscape, A Didactic Poem*. London: W. Bulmer and Co., 1794.
- Marshall, William. *A Review of The Landscape, A Didactic Poem: also of An Essay on The Picturesque: together with Practical Remarks on Rural Ornament*. 1795.
- . *On Planting and Rural Ornament*. London: W. Bulmer and Co., 1796.
- Mason, William. *The English Garden. A Poem*. London: A. Ward, 1783.
- Phillips, Henry. *Sylva Florifera: the Shrubbery Historically and Botanically Treated*. London: Longman,

1823

Price, Uvedale. *An Essay on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful; and, on the Use of Studying Pictures, for the Purpose of Improving Real Landscape*. London: J. Robson, 1794.

Thomas, Keith. *Man and the Natural World: Changing*

*Attitudes in England 1500-1800*. Oxford: Oxford U. P., 1983.

Wordsworth, William. "Introduction" to *Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire* by Joseph Wilkinson. London: R. Ackermann, 1810.